Sad Lovers

吉良　結衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓａｄ　Ｌｏｖｅｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ４８５６Ｗ

【作者名】
吉良　結衣

【あらすじ】
腐女子を主とした、ちょっと寂しい大人たちの恋愛事情。

オタミ

名前、
奥田（おくだ）　環（たまき）

年齢、
２９歳

髪はボサボサで、家ではＴシャツにジャージ…全く女を感じさせない。

性別、
一応…女？

ごく普通の大きさ。

身長、
１５５くらい

体重、
言えない…

上から…

「その１メートルメジャーで足りませんが？」

趣味で、小説執筆するごく普通の腐女子なアタシ。
「あぁー…」
唸り声を上げて、
「暑い…」
小さな扇風機に愚痴る。
「暑いんですけどぉ？」
伸びた前髪が扇風機の羽根に当たり、
『髪、切りに行くかぁ』
おもむろに起き上がり、めまいが…
「うぅ…」
そういえば、まだ何も食べてない…
「気持ちワルぅ…」
今、何時だろう…？

タマ

名前
田熊（たくま）　瑠果（るか）

年齢
永遠の…何とか。

中性的な顔立ちで、年上に人気あるが故に…

「え？」

修羅場は日常茶飯事。

色々鍛えて…

「おはようございますっ」

何、目指してるんだか。

身長
１７２

体重
ヒミツ

上から…

「測っていいのは肌を見せ合った貴方だけ」

「ふぅ…」
ベランダで服を着て、靴を履いて…
『バイバイ』
いつもの事で慣れてしまってるが、
『不倫はあかんっ』
俺、いつになったら普通に恋愛出来るんだろ。
「あ、」
ライター忘れた。
「……戻る、か……」
あれ、オタミから貰ったんだよなぁ…
『最低』
オタミに言われるとマジ凹むから、それだけは避けたい。

ポチ

名前、
乾（いぬい）　牡丹（ぼたん）

年齢、
３１歳

性別、
男

職業、
カフェの店長

「いらっしゃいませ」

副業、
離れ屋

「ポチ、助けてぇ〜」

時々、オタミ専用散髪屋。

「今、忙しいから…」

結構、マイペース。

「暇じゃんっ」

オタミの散髪は、お仕事です。

「またぁ？」
オタミ、俺の代弁をありがとう。
「俺、いつだって全力だよぉ？」
でも、タマはいつだって本気ではない。
「うーん…」
オタミ、言葉にならない感情らしい。
「タマ、後で聞くから…」
出ていけ。
「ひどぉ～い」
毎度、タマの為に必要人材集める身にもなれ。

ビスケ

名前、
大里（おおざと）　大輔（だいすけ）

年齢、
３１才

性別、
男

身長、
ポチを見上げる位、

体重、
ポチにお姫様抱っこされる位、

「また痩せた？」

職業、
売れない役者、

「うん？」

嘘つくのは下手。

「いらっしゃいませぇ～」

副業、

女装しながらの接客業
「ビスケくぅ～んっ」
本業より人気有り？

居候も、はや１０年。
もはや空気のような存在の同居人に、
「好きだもん、困る」
ようやく（？）告白される。
「はぁ？」
いやいや、俺も好きだけど…
「こんなに人気が出たら困るっ！！」
俺的には、ありがたいんですけど？

漢字、書けない～オタミ～

読めるけど書けない。

薔薇…

バラ…

そう、薔薇の花束を今、持ってる。

「お願いします」

何かの罰(ばつ)ゲームか、それとも…

「た、環さん？」

ドッキリ？

「……はい？」

カメラを探すが、素人のアタシでは無理だ。

「これ、ココにあるのがいいかと思って…」
このお店にも、幸せを。
「オタミに？」
彼氏、出来たよ。
「キセキだな…」
アタシも思う。
「絶対、おっぱい好きだな…」
何故、皆、頷く？
「オタミの中身を知らない男だろうなぁ…」
頷き過ぎっ！

複雑なオトコゴコロ〜タマ〜

スゴく幸せそうな顔で

「彼氏、出来たよぉ」

オタミに特定のヤツ（カレシ）は出来ないと思ってたので、

「これ、ココにあるのがいいかと思って…」

ショック…というか…

なんというか…

ショックなんだろうなぁ…

若干負けた感が否めない。

「オタミに、ねぇ…」

溜め息まじりに薔薇の花びらを一枚、力強く引き抜く。

「絶対、おっぱい好きだな…」

オタミの第一印象は、触りたくなるくらいデカい胸。

『ご、ごめんっ』
実際、初対面で触ってしまった。
『ホンモノですよぉ？』
怒るワケでもなく、恥ずかしがるワケでもなく、
『見る？』
むしろ、慣れてる？
「いや、好きじゃないんだって…」
自分のおっぱい揉みながら言うオタミ。
「オタミ、ルカお兄さんは…」
オタミのそういう天然エロ具合が、かなり好きです。
「はぁい？」
最後まで言えずに、元カノからの着信に出る。
『聞いてる？』
本気になるのは怖い。
「あー、聞こえない～」
もっと怖いのは、本気で向かってくるヒト。
『ワタシ、』
本気になるなよ。
「ふぅ…」
着信切って、そのまま携帯電話の電源ｏｆｆ。

犠牲者、5人目～ポチ～

「オタミに？」

うん。って、そんな無垢な笑顔で攻めたのか？

「彼氏、出来たよぉ」

いかん。離れ屋を手ぇ抜いてたワケじゃない。

「これ、ココにあるのがいいかと思って…」

薔薇？

「ポチ？」

上目遣いで攻めたのか？

「要らなかった？」

首を横に振り、薔薇の花束を受け取る。

オタミが幸せになって欲しいから。
「キセキだな…」
俺は、オタミに嫌われていい。
『ポチ？』
目で訴えかけるビスケ。
『オタミの事、理解してくれるかなぁ？』
その眼差しは、スゴく理性を失う。俺には毒かも。
「あぁ…」
今回こそアタリであるように切に願う。
「タマ以外なら俺は安心だ」
タマのような心がない男の元には渡しません。

意味、知らない～オタミ～

「……ごめん……」

突然のお別れだった。

「じゃあねぇ」

無理して、笑顔で手を振った。

「ふぅ…」

意味、知らない。

『絶倫』

て、何だろう。

「腐女子が知らないってあり得ないっ」

エロ物書きであって、エロいの好きじゃないもん。

「絶倫…？」
何だろう。
「オタミの場合、超人的な性欲」
アタシの場合？
「オタミ、一日に何回イクの？」
うーん…
「待て」
指折りながら数えるアタシに、
「リアルに数えなくてイイ」
肩を叩いて、ポチは溜め息を吐く。
「オタミ、性癖は？」
普通。
「ノーマルだよっ！！」
って、何でそんな事…
「ポチさん、そろそろ開店の時間ですよぉ」
メイド姿のビスケに、
「ビスケっ」
萌える！！
「可愛いぃ～」
リアルに男の娘を見たら萌える。萌える。

意外な落とし穴〜ポチ〜

「ポチ、絶倫って何？」

今回の殿方は、刺客を送るまでもなく…

「辞書で調べなさい…」

オタミの性欲って、底なし？

「辞書ないから聞いてるのにぃ〜」

帰ろうとするオタミを止めるのは、

「環ちゃん、教えてあげようか？」

常連客の田老（たろう）さん。

「本当ですかぁ？！」

目をキラキラ輝かせて、田老さんに連れていかれそうになるオタミを止める。

「オタミ、教えるから」

意外なトコロに敵がいた。

「田老さん…」
スタッフルームで話すからとオタミには先に行ってもらった。
「乾くん、結構過保護なんだねぇ」
田老さんは、ただの常連客ではない。
「今回のコは白だったよ」
探偵屋さん。
「って、環ちゃんとは終わりになっちゃったから今回はチャラでいいよ？」
探偵にしては勿体無いくらいの綺麗な顔。
「キッチリ払わせてもらいます」
オタミがらみはもう他所の探偵屋さんに頼もう。

タロウ

名前、
田老（たろう）　菖蒲（あやめ）

よく言われるのは、
『名前かと…』
『女性かと…』

思われるのは慣れました。名付けた親には憤りを感じてます。未だに。

年齢、
４２

『アタシより年下かと思ったぁ～』

可愛い環ちゃんに言われたらお世辞でも嬉しい。

性別、
男

『見た目も女みたいだよぉ？』

天然な環ちゃんに言われたら許す。

身長、
１７８

体重、
『痩せすぎ』表示が出た。気を付けて『標準』に戻そう。
上から…
「アヤさん、お箸忘れてますよぉ～」
長男・翼（つばさ）、１２才。
「アヤたん、いってらっしゃいっ」
次男・海（うみ）、５才。
「はい、いってきますっ」
バツ２の子持ち。
「いってらっしゃいっ」
「いって、らっちゃいっ」
異母兄弟ですが、２人とも俺似。
「アヤたん、お母さん持ってきてねぇ～」
たまに痛い事言う…
「アヤさん、俺達なら大丈夫だよぉっ」
お父さん、彼女がいないんだよっ

好きな人はいるけれど。

「環ちゃん、好きなんだけどなぁ…」
問題は…
「オタミには手を出さないで下さい」
過保護な親友。
「嫌だ」
俺、好きなコにはアピールしまくるから。
「オタミを幸せにできる自信あるんですね？」
笑いながら怒るなよ…。
「はい」
俺だって、環ちゃん幸せにしたいもん。

ココロの免疫力〜タマ〜

「暑い…」

エッチしてないのに暑い。

「熱い…？」

もしかして？

「風邪？」

尚更、全身運動しなきゃ。

「ルカ？」

腰をヒクつかせて、

「もう限界？」

玩具がキモチイイと思うコには。

「は、激しいって…」

『強』責め。

気持ち良さそうな顔見てると…

「可愛い…」

でも今日はチューでやめとこう。

独りでいいと思う。
「ルカ…」
はっきり言って、無理なんだよねぇ。
「はい。終わりぃ〜」
好きなのは…
「彼と別れるから…」
エッチな行為と
「ずっとお客様でいてくれる？」
お金。
「うん…」
嘘より真実を言って欲しい。
「俺、今はまだ付き合いたくないんだよねぇ」
ごめんなさい。
「そう…」
柔らかい女性の体は好きだよ。大好き。

うまく言えない～ビスケ～

好きって言えば楽になるのはわかってる。

「ビスケ～？」

頭では解ってるのに、言えずに…

「おいっ」

ヒョイと抱きかかえられて、今、寝転んでるポチの体の上に乗っかってます。

「うわっ」

たまには考え事してみるモノだなぁ…

「ビスケ、」

ポチの顔が近付いて来るっ

「は、はいっ…」

チューできる距離で、

「ヒゲ」

生えてる。と言って、抜いてくれるポチ。

「まぁ、至近距離じゃないとわかんないか…」
耳元で言わないで…感じるっ！

「ポチ、す…」
「あっ！」
どさくさに紛れて、軽くチューされた。
「オタミ、来るんだった…」
次は、結構濃厚なチューで。
「歯磨きしてから仕事入るようにっ」
また軽くチューするポチ。
「ポチ？」
下が起き上がってますよ？
「ビスケ、俺だって我慢して…」
我慢なんてしなくていいっ！！

そんなんじゃない～ポチ～

好きで仕方ない想いは、頑なに秘密でいるつもり。

「ポチ？」

上目遣いでメイド姿のビスケに反応するけど、

「ビスケ、俺だって…」

我慢して、我慢して、後で処理するんだよ。

「我慢しなくていいよっ」

ダメだ。

「ダメだっ」

襲われるより襲いたい。

じゃなくて、

「ビスケがいろんな事出来るようになるまではダメ」

エッチで。

「不器用だもん…」

拗ねるビスケもまた良し。

「ビスケ、大好きぃ」
ムギュッて…
「オ、オタミッ…」
ダメだって…
『もっと嫌がれよ…』
まんざら嫌でもないご様子に、何故かムカつく。
「ビスケ、可愛いもんっ」
あ、押し倒した。
「待て」
オタミ、俺のビスケに手を出したらあかん。
「オタミ、それ以上は許しません」
そういうお店じゃないから。

スー

名前、
佐久間（さくま）　涼樹（すずき）

年齢、
２５才

性別、
男

「オタミを？」

職業、
探偵

「ビスケくんはいいの？」

身長、
１８０超え

体重、
７０くらい？

彼女イナイ歴、
自分の年齢とイコール

だって、

「ビスケは大丈夫」
俺、女に興味ないもん。

あー…寒い。
「スーちゃん？」
目の前に、オタミがいる。
「オタミ？」
いつの間にか追い越した？
「やっぱりそうだぁ～」
俺、探偵失格かも。
「おっきくなったねぇ」
上から下まで見て、
「オタミもおっきくなったねぇ」
目が、オタミの胸にロックオン。
「小さくなったよぉ」
触る。
「そう？」
あまり変わらないけど…
「ゴメンッ」
ついつい掴んでしまった。

「いいよ」
離そうとした手を掴んだオタミ。
「最近、有効活用してないから」
思わず、抱き寄せた。
「オタミ、」
空元気に笑ってみせるのは、全部ポチのせい…？
「乾先輩のお店って…場所わかる？」
とりあえず、断ろう。

元ゲイから見る光景〜タマ〜

俺は、本気にならない。いや、『なれない』のか？

「ルカ…」

元は受け体質なのだ。だから女性のいやらしくなる位置は容易く見つける。

「うん。イイ顔してるっ」

嫌いじゃないよ。触れ合うのは…

「恥ずかしい…よぉ…」

恥ずかしがるほんのり赤い頬に触れる。

「素敵だよ？」

『ルカ…』

初恋で、初めて付き合った、初めての人。

『好きだから…別れよう…』

忘れられずにいる。

「ルカ？」

最近、最中でも思い出す。
「もっと欲しいの？」
忘れたいのに。

「タマ？」
ふと物思いに耽る。
「ん？」
今、ポチのお店に居る…？
「もう一杯…」
最近、よく思い出す。
「タマ、飲み過ぎ」
そして、忘れたいから。
「もうちょっとだけ…」
「タマ、飲み過ぎって言われてるでしょ？」
グラスを奪われて、
「はぁ？」
ムカついたから、
「俺の、だっ！！」

思いっきり相手の胸ぐら掴んだら、
「……スー…？」
酔い過ぎて、マボロシ？
「普通、自分の頬つねらない？」
夢？
「タマさん、本物だよっ」
両方の頬をつねるのは…やっぱり、スーなの？
「タマッ？！」
眠い…

再会からの堕落的展開〜スー〜

「タマ…？」
お店に入ると、
「タマ、飲み過ぎ」
泥酔してるタマがいた。
「タマ、飲み過ぎって言われてるでしょ？」
グラスを奪い、
「俺の、だっ！！」
案の定、キレて向かってくるタマ。
「……スー…？」
再会なんて、こんなモノかなぁ…？

スヤスヤ眠るタマ。
「何かあったんですか？」
これ。と言って、俺の膝を占領するタマを指す。
「そうだな…」
頷いて、
「オタミにバレた？」

相変わらず、鋭い。
「はい…」
笑顔で怒る乾先輩に、嘘はつけません。
「そう、か…」
手際よく生ビールを用意してくれた。
「これからも頼みます」
オタミにバレたのにいいんですかぁ？
「昔馴染みの方が、オタミにはいいんだよ…」
ん…？
「……すー……す、き…」
寝返りと寝言で、下半身刺激するとは…

【外伝】Lovers～present～（前書き）

タマとスーのナレソメ。

【外伝】Lovers～present～

昔からの夢、そして、これからの俺の職業。
小説家。
なるために、いっぱい数え切れない程、たくさんの犠牲があった……気がする。
「真人間タマっ？！」
俺が髪を真っ黒にしただけで、真人間って……俺って、どれだけ軽い？
「チャラいから仕方ない」
後ろ姿しか見えないポチから、ストレートに言われた。
「ポチ、俺だって傷付くんだぞぉ？」
男の娘・ビスケはオーダーした品物をテーブルに置いて、
「サインお願いしまぁ～すっ」
改めて、この本を見ると照れる。
「はい……」
最愛の人との思い出が、たくさん詰まってるから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4856w/

Sad Lovers

2012年1月14日10時47分発行